

日本・キリシタン音楽教育の原点

—南蛮文化との出会い；イエズス会士 A. ヴァリニャーノ
によるミッション教育の軌跡の探訪—

進 藤 務 子

The Origin of the Christian Music Education in Japan

— The Extraordinary Encounter between the European Culture and
the Japanese in the late 16th Century ; Seeking for the Outcome
of the Catholic Mission by Padre. A. Valignano —

SHINDO Michiko

Abstract. What was the beginning of the education of Western music in Japan? As numerous results of studies which many scholars have gained show, we may say that, the answer would be that the missionaries from the Society of Jesus came to Japan in the middle of 16th century in order to preach Christianity and taught the Japanese converts how to sing great number of Gregorian chants and how to play various kinds of musical instruments, such as the previous-type of the viola and the organ. In fact, when we read historical materials written by those padres, it is not difficult to find the facts that 400 distant years ago, the Japanese at the time adored Western music quite, whether they loved the Christian ideas/doctrines or not, and also the high quality of musical education was provided in the educational, religious institutions (especially, the schools called *seminario* and *collegio*) which those Jesuit missionaries established, although people today tend to think that the flourish of the education of Western music emerged after the Meiji restoration.

The first contact between the Japanese and the Westerners stretches back to 1543, when the Japanese old-type firearms was first brought to Japan by shipwrecked Portuguese merchants. Soon after that, their commercial contacts were developed into the Nan-ban trade, and this was soon followed by the missionary work towards the Japanese, since at that time, the Iberian countries enjoyed the great age of exploration with their economic and political ambitions. On the other hand, Japanese feudal lords, who were in pursuit of their own economic motives, were fairly attracted by the trade income as well. Thus, the Nan-ban trade and the expansion of the churches in Japan were inseparable for their financial reasons.

However, the religious music appealed to inhabitants' hearts as a cultural aspect of Christianity. An Italian Padre, A.Valignano, who endeavoured to spread the Christian faith and religious education in Japan, attached a huge importance to this effective, spiritual exchange, in teaching at church-related schools. I shall examine his efforts and the outcome of such education of religious music in Japan, taking the following examples of seminario timetable and the despatch of *Tensho* boy-missions to Rome, '*Manuale ad Sacramenta*' and '*uta-oratio*', one of crypto-Christian's heritage, from various points of view; political, social and cultural backgrounds in Japan in this essay.

キーワード：日本宗教音楽教育, ヴァリニャーノ, 天正遣欧使節, サカラメンタ提要, 歌オラシヨ

Key Word : Education of religious music in Japan, A.Valignano, Tensho. boy envoys, *Manuale ad Sacramenta*, *Uta-oratio*

序

16世紀半ば、キリスト教宣教師たちの来日は、西洋と日本の交流の歴史の幕開けと同時に、キリスト教礼拝に伴う音楽教育の最初の導入の機会をももたらした。宣教師らは、布教の許可を得た後、都はもとより、豊後府内と有馬にもキリスト教の教育機関を設立した。特に、巡察師としてキリスト教伝道者の育成を中心に布教活動を行ったパードレ、アレッサンドロ・ヴァリニャーノが、日本の最初の宗教音楽教育において、果たした役割は大きい。

キリスト教宣教師たちがその礎を築いた学校のなかでも、特にセミナリオと呼ばれる中等教育のための神学校における宗教音楽教育には目を見張るものがあり、西洋音楽教育の興隆は、一般に明治維新以後と認識されていることも多いのだが、我々はここに、日本における初めてのキリスト教音楽教育の萌芽を見出すことが出来るだろう。

小論は、当時のキリスト教の布教および日本人クリスチャンたちを取り巻いていた、政治的・文化的・外交的背景に言及しながら、16世紀後半の日本における、音楽教育について述べようとするものである。以下の部分で、グレゴリオ聖歌が伝来当時、どのように日本人クリスチャンらによって歌われ、ほどなくして訪れたキリスト教禁教下の日本で歌オラショとして継承されてきたか、また、典礼音楽としての器楽教育、特に礼拝用のオルガン教育がどのように施され、生徒たちが演奏技術を身に着けたのかを、集大成として、ヴァリニャーノによってローマに派遣された、天正遣欧使節のエヴォラ大聖堂での演奏の経緯と、帰国後の太閤秀吉への御前演奏の様子を記した記述を基にたどりながら、詳細に分析し、考察を加えていくこととする。

I. 日本の政治的・社会的・文化的背景

初めに、キリスト教がフランシスコ・ザビエルら、イエズス会宣教師たちによって、はじめて伝来した当時の日本について、政治的・社会

的・また文化的側面から触れてみたいと思う。日本におけるキリスト教界をとりまく情勢は、ザビエルが来朝した1549年から、江戸幕府による1614年の禁教令が出されるまでの、わずかな期間に刻々と変化したが、ここでは、日本のキリスト教布教の第一期とも分類されるこの期間に焦点を当ててみていこうと思う。

当時の日本国内の様子は、およそ十年間に渡って続いた応仁の乱（1467～1477）の後の混乱を受けて、室町時代に花開いた文化も荒廃した、群雄割拠の戦国の世の只中であつた。このような日本において、宣教師たちの布教活動と、人々のキリスト教受容は、どのように進んでいったのであろうか。

まず最初に、宣教師らの見た日本は、どのようなものであつたか。これは、スペインの世俗の二名の人物、ドン・ロドリゴとヴィスカイノの記した『見聞録』からの抜粋を引用しておこう。それには、政治的な面については、「日本人の政治は、私の知る限り、世界で一番優れている。彼らは神を知らないにもかかわらず、完全なる数多くの法律を持っており、しかもそれは慈悲にかなったものだ…領主たちは攻落不可能な城を持っており、誰もが戦略を重視している」という彼らの評価と、日本人の性質をのしる部分として、「日本人はシナ人・朝鮮人・テルナーテ人その他マニラ付近のいかなる国民より、好戦的で勇敢な国民である。彼らは長銃を用いることに長け…」という記述が見られる。

一方で、西洋のキリスト教布教は、なぜ地球の裏側に位置する、遠い東の果ての「ジパング」にまで及んだのかを知る必要がある。その理由は、西洋で興った大航海時代の到来に伴い、海外における政治的・経済的な版図拡大とともに、野望に溢れた冒険心でもって未知なる異教徒の地へ赴き開拓すること、そして自分達は優越的な人種として、異教徒の人々を教化し、キリスト教の福音を述べ伝える使命を帯びている、という西洋を中心とした、西洋人による価値観が生じてきたからに他ならない。これは、ローマ教皇をも喜ばせる大事業で、当初はキリスト教の布教は、日本布教にはあまり興味が注がれて

いなかったにも関わらず、南アフリカの喜望峰、さらにはインドのゴアや中国さえも回って、ついには日本に到達する次第となったのであった。ザビエルと日本人アンジローとの出会いが、ザビエルに日本布教の決意を固めさせ、ザビエルは、他の数名の宣教師とアンジローを伴って、彼の故郷鹿児島島の地に降り立つのである。

宣教師らのたてた布教方針は、縦に連なる日本の封建社会と彼らの性格をふまえ、まず大名ら権力者をキリスト教に入信させれば、その勢いで一般民衆も一気に教化することが可能である、という信念に基づいたものであり、ザビエルが最初に示していたこの見解は、豊後府内や安土等、特定の地域においては、ある程度、的を射た結果を生んでいる。

そもそも西洋と日本の初めての出会いは、通説では、キリスト教伝来に先駆けること数年、1543年の鉄砲伝来であると言われている。この時も、ザビエルと同じポルトガル人が、たまたま漂流した際に携えていた火縄銃が、戦国武将たちの目に留まり、従来の戦い方をすっかり変えてしまう契機となったのだ。戦国武将たちは、この鉄砲伝来によって既に、西洋の国々とその文化に興味を抱き始めていたと言えるのではと考えられる。

ここで、音楽という一観点から、当時の文化状況も見ておきたい。竹井成美氏によれば、「1468年に著された『ひとりごと』には、当時の芸能界の動きがつぶさに示されている。そこには、音曲（琴・箏・琵琶・謡・朗詠などの弾き物と謡い物）、吹物（笙・ひちりき・尺八・笛など）、早歌（長編歌謡）などの音楽一般に関する話題…幅広く記されている。」とあり、当時の多種多様な日本音楽の展開をうかがわせる。一般の庶民たちは、同氏が指摘するとおり、琵琶法師の奏でる琵琶の音色に耳傾け、心をなぐさめていた。

実際、宣教師と共に、イルマン（助修士）としてキリスト教の布教活動の一端を担ったとされる日本人、ロレンソもまた、この琵琶法師であった。日本の楽器と宣教師らによってもたらされた西洋の楽器について、竹井氏は同著の中

で、非常に興味深い比較を指摘している。

時の為政者であった織田信長（1534～82）は、南蛮文化によってもたらされる、生糸や南方産のめずらしい物品等によって得られる利益に着目したことと、全国平定の多大なる障害となっていた、一向宗の一揆に対する牽制する目的や、仏教内での対立などに対する宗派間の勢力均衡を図ることを期待して、南蛮貿易とは不可分であったキリスト教の宣教師たちを厚遇した。信長は、1579年にはオルガンティーノに京都の南蛮寺を、又1581年には、巡察師ヴァリニャーノに対しては、安土の城下町に、キリスト教の小神学校であるセミナリオの建設を許している。

さらに、近畿・九州地方を中心とした地域の大名家のように、自らの領地においての布教を認め、かつ、その活動のために、土地を提供するなどの庇護を与える者も現れた。大半は、やはりポルトガル船との交易を通じて得られる利益に着目したり、自らの権力を領外に見せ付けることによって、他の戦国大名からの攻撃を回避しようとするなど、打算的な目論見があったと言われているが、その教義に感銘を受けて、熱心な信者となった大名もいた。ポルトガル船は、これらの大名領にのみ入港したので、彼らが事実上、南蛮との交易を通じて、かなり莫大な利益を手中に収めていたものと見受けられるのは確かであるが、大友宗麟（豊後領主）・大村純忠（肥前大村領主）・有馬晴信（肥前有馬領主）・高山右近（高槻城主）などは、自らもキリスト教に入信してキリシタン大名となっているし、大友宗麟は日本布教長のカブラルから、有馬晴信は、ヴァリニャーノから直接洗礼を受けており、諸説あるものの、大村純忠は、長崎の地をキリスト教会に寄進するなど、キリスト教の教えを実践した、と報告されている。

このように、キリスト教布教を進める上で、宣教師たちを取り巻く環境は、来朝時の織田政権から豊臣秀吉によってバテレン追放令が出されるまで、かなり厚遇を受けたものであったといって良い。

一般民衆についても、仏教界の僧侶たち自身が、貴族的な享楽に溺れたり、武装して戦うな

どといった、宗教的救済を与えるものとしての求心性を失っていたために、信長をはじめとして、大名たちの庇護を受けた新来のキリスト教が、弱き者たちの心を捉えたのは、想像に難くない。それは、おそらくキリスト教の根幹が、「神の前には、女子供・社会的弱者もすべて平等であり、神の愛は万人をあまねく導く」という教えであるから、この平等という部分が殊に、戦国の世に生きる人々の心の拠り所となったものであろう。

II. ヴァリニャーノと教育指針

次に、1579年に来日し、日本でのキリスト教教育に貢献したイタリア人のパードレ、アレッサンドロ・ヴァリニャーノと彼の設立した神学校セミナリオ (Seminario) での教育について、概観する。

まず、ヴァリニャーノとは、いかなる人物だったのか。初めて来日した時、ヴァリニャーノは巡察師に任ぜられ、フランシスコ・ザビエルに遅れること30年、ザビエルの意思を引き継ぎ、日本宣教での様々な行き詰まりを打破して、より多くのクリスチャンを獲得するという大きな目標を掲げていた。当時の日本教会は、経済的に危機存亡の時を迎えており、すでに日本にて布教活動を行っていた宣教師たちにとって、彼の来朝は、あたかも救世主のごとく待ち望まれたものであったという。

上記でも述べたように、日本におけるキリスト教布教は、マカオと日本間での生糸を中心とした南蛮貿易に密接な関係があり、不可分であった。それは、当時の日本で、金銭的苦境にあえぐイエズス会が、布教のために依存できる、ほぼ唯一とも言える資金源であった為だった。しかし、これは布教の目的上、好ましい資金調達方法とは言えず、ヴァリニャーノには、この早急に解決を要する問題に対して、いかに日本に対する経済的援助を取り付けるかという問いも課せられていた。

ヴァリニャーノの日本布教に対する姿勢は、非常に柔軟で、日本布教長には、ポルトガル人



A. ヴァリニャーノの肖像

のフランシスコ・カブラルが就任していたが、この布教長との対立は甚だしく、彼らの日本人観と、それゆえの布教方針には、大きな食い違いが生じた。ヴァリニャーノにとって、もっとも苦心したのは、カブラルとの確執の中で、いかに自らの信条を反映した布教活動を展開するかであった。カブラルの日本および日本人観が「…領主達は、打算的にキリシタン宗門や自分達イエズス会員を南蛮貿易に関連してしか考えていない。日本人ほど傲慢、貪欲、不安定で偽装的な国民を見たことがない。彼らが共同の、そして従順な生活ができるとすれば、それは他になんらの生活手段がない場合においてのみである。…日本人修道士が研学を終えて、ヨーロッパ人と同じ知識を持つようになると、何をするのであろうか。…日本人は、同宿として用いるべきである。」といったものであったのに対し、ヴァリニャーノは、と主張し、カブラルに一貫して反駁した姿勢を貫き続けたからである。ヴァリニャーノにとって、もっとも苦心したのは、カブラルとの確執の中で、いかに自らの信条を反映した布教活動を展開するかであったと言って、差し支えなからう。

この姿勢は、ヴァリニャーノが各地にセミナリオを設立し、実際の教育にあたる時にもおおいに発揮され、後の天正遣欧使節派遣へと続く、大きな貢献を残すことになる。ヴァリニャーノの来日当時、日本での布教区域は既に、南は鹿児島から、東は美濃や尾張にまでも広がり、長

崎, 有馬, 天草, 豊後, 山口, 京都, 高槻, 堺, 安土などでは, かなり大規模な信徒集団が形成されていたが, 畿内と九州地方では, キリスト教への改宗の進行状況に, 差が見られた。

ヴァリニャーノは, 来朝当時, 既に都地方長として, 京都で多数のクリスチャン人口拡大に成功していた, 自らと同じイタリア人宣教師, オルガンティーノ・ソルドによる日本人観に大きく影響されていたことが, 書簡を通してうかがえる。ここでは, 1577年9月20日付のベルナルディーノ・フェラロ宛の書簡を例にあげ, オルガンティーノの日本人に対する評価を見てみよう。「日本人は, 世界でもっとも賢明な国民に属しており…われらの主なる神が何を人類に伝えたもうたかを見たいと思うものは, 日本へ来さえすればよい」。ここには, オルガンティーノの並々ならぬ日本人への賛辞が読み取れ, いささか賞賛しすぎな感すら否めない。ヴァリニャーノが受け取る日本人観は, もともとこのようなオルガンティーノに強い影響を受けているので, 彼は来朝前から日本人に好感を抱き, オルガンティーノの要請に応じて, 四十四人もの宣教師を日本に派遣し, その際, 自分が来日するまでに, ぜひ彼らが日本になじみ, 日本人信者との交流がより円滑であるようにと, 日本語に習熟していることを願っていた。

しかし, 九州を拠点にしていたカブラルは, 日本人同宿, 況や平信徒は, 西洋人宣教師と同列に列されるべきでは断じてないし, 日本人をイエズス会に迎えて司祭に叙階するなどでもないという考えの持ち主であったから, 常々から「所詮, お前達は日本人だ」という発言をしていたので, もちろん, 相互理解を促進するための言語習得などに力を注ぐはずもなく, 「宣教師たちの会話が, 日本人に解されるようになることを嫌って」さえいた。このカブラルの姿勢は, 言うまでもなく, 日本人とヨーロッパ人宣教師との間に, 不一致と嫌悪を生じさせた。

ヴァリニャーノは, カブラルの意に反して, セミナリオを設置し, 日本のクリスチャン達に教育を授けることの重要性に重きを置いた。彼は, 『日本イエズス会誌礼法指針』のなかで, 「日本

人のイルマンに対して, あるいは, 日本のことを知っている思慮深いクリスチャンやカザの友人たちに対して, あらゆる件についてごく度々助言を求めるということは, 何にも増してパードレの權威を維持するのを助けるであろう。…日本の習慣や気質は, ヨーロッパのそれとは, あらゆるところで大いに異なっているので, パードレたちは, この助言を得ることなしには, 多くの場合, 自信をもって行動することができないからである。」とまとめていることから分かるように, 音楽教育や, 外国語習得云々以前に, 異文化の中での融合のあり方を心に留めて, キリスト教本来の精神を伝えるべく, 『日本諸事要録』中に見られるように, 「もっとも有能でよく教育された国民…全アジアで最良の信徒となろう」とヴァリニャーノは, 大きな期待をこめて, 教育方針を定めた。

その内容も, 日本人のクリスチャン生徒をイエズス会の司祭に成長させるべく, ラテン語と日本語の両方を学ぶように時間割を決め, 才能のある生徒達には, クラヴォ・モノコルディオ・オルガン・ギターなどの楽器を学ばせて, 祝祭に盛大に関わるよう, 努めたものであった。相互理解のために最も必要な, 対等な立場での対話を行う。ヴァリニャーノの教育の原点は, ここに強く帰結されるものである。

Ⅲ. セミナリオでの音楽教育とその成果・遺産

さて, 以下の部分からは, 上記で概観してきた歴史のおよび文化的背景をふまえた上で, 当時宣教師によって, キリスト教の宗教音楽教育がどのように施されていたかについて, 歌唱教育分野と器楽教育分野に大別して, 見ていこう。当時, 西洋からやって来た宣教師らにとって, 日本の音楽がどのように聴こえていたかについては, フロイスの著した『日欧文化比較』の中で, 興味深い評が綴られており, 「ヨーロッパの諸国民においては, 歌うとき, 必ず声を震わせるが, 日本人はそれを全くしない」というものや, 「日本では, 全ての人が同一の音階でわめき歌う」という内容である。初めて, 異文化

の音楽に接した西洋人の感想が、純粋な驚きでもって、生き生きと描かれている。

更に、歌だけでなく、器楽についても、「西洋人の様々の音響の音楽は、響きよく快いものであるが、日本の音楽ときたら、総じて単調音がキシキシと響くだけで、これ以上あろうかというほど、ぞっとするようなものである」と述べている。しかし、日本人の西洋音楽に非常な興味を示して受容しようとする態度は、フロイスをして「西洋人は日本の音楽を破調と感じ、同じく日本人も西洋人の音楽を破調に感じるであろうに、彼らは好んでアルピコルヂ、その他の楽器を奏し、教会の礼拝用のオルガンの使用に熟達している」とも言わしめている。

【歌唱教育分野】

歌唱教育は、音楽教育のごく最初の段階から導入されたもので、ミサに不可欠な典礼音楽、すなわちグレゴリオ聖歌が教えられた。音楽は、日本においてのみならず、キリスト教の教育機関では全て、礼拝儀式と直結するものとして正課となっていたし、音楽教養を身につけて典礼に奉仕するように年少者を育成することは、信仰教化を進める上でも重要であったから、日本のキリシタン児童達にも同様の教育がなされたのである。

我々はここで、先にグレゴリオ聖歌の典礼における位置づけを、確認する必要がある。水嶋良雄氏の『グレゴリオ聖歌』によれば、教会はグレゴリオ聖歌を、「ローマ公教会固有の聖歌」であるとし、「古代の教父たちから受け継いだ唯一の聖歌、教会が幾世紀の長きに渡り、その典礼の中に営々と守り続けた聖歌、教会が信者達に対し、全く教会自身のものであると提示し、さらにその典礼のある部分において独占的に（これのみを歌うように、と命じている）規定している聖歌」とみなし、また、同氏がグレゴリオ聖歌の本質は、「祈りの音楽」或いは、「歌となった祈り」である、と定義づけているように、典礼のなかで、「祈りに奉仕する」立場ではなく、「祈りと一体化された音楽」であった。

元来、キリスト教では、仏教や禅など、当時

の日本にとっての在来の宗教とは異なり、音楽という聴覚芸術を神との対話の手段として用いる宗教である。それまで、彫刻や絵画といった視覚芸術、すなわち「静止の芸術」にしか主に触れたことのない日本人にとって、音楽、それも詩とともに祈る音楽に初めて触れたとき、彼らはいかばかりに驚嘆し、また感銘を受けたであろうか。

上記でも言及したが、教養の高いものばかりはいない、一般の民衆に分かりやすく説法していく方法として、当時の琵琶法師のように、音楽を用いて教義を説いていくのは、非常に効果的なことだと思われる。また、日本人の西洋の珍品に非常に興味を示す性質を目の当たりにしたこともあり、キリスト教の宣教師も、音楽を用いた布教方法に着目した。

ここで、西洋のルネサンス旋風が音楽分野へもたらした影響についても、軽くふれておこう。ルネサンスは、15世紀に円熟をみせたが、邦語訳としてしばしば用いられる「文芸復興」が表すように、美術や文学の分野においてのものであり、ルネサンスが音楽の分野に新たな息吹を吹き込んだのは、ブルゴーニュやフランドルを中心に、16世紀前半になってからのことなので、日本にキリスト教が伝来した時期と、完全に一致している。この新しい動きは、厳粛な祈りの音楽としての位置づけにあったグレゴリオ聖歌にも例外なく影響し、時の西洋音楽におけるルネサンス黄金期の華やかさが、多分に及んでいた。換言すれば、ポリフォニー（複旋律音楽）性が、グレゴリオ聖歌にも持ち込まれ、華美な賛美歌が好まれる傾向にあった。

ところが、実際のところ、西洋での宗教音楽への傾向としては、プロテスタントに対するカトリック界の体制として、トリエント公会議（1545～63）が開かれ、原点の教えに立ち返り、質素かつ清らかなものを求める声が上がっていた。これによって、イエズス会としても、礼拝音楽の簡素化に極力努め、器楽音楽をも削減していくべきという姿勢が強まるなか、ヴァリニャーノが、日本布教における音楽の重要性を強く認識して、積極的に教育の中で、宗教音楽教育を

施す方針を打ち出したのは、まさに英断であったと言える。

とは言っても、実際の教授の場面では、幾多の困難が生じた。上記の、フロイスの『日欧文化比較』では、西洋と日本の習慣の違いが、多岐の分野にわたって、事細かに「我々の～においては…だが、彼らの～は…である」という形式で綴られているのだが、こと音楽に関しても、日本音楽と西洋音楽は、旋律の点から言っても、発声法についても、そもそも共通点は全くといってない、と断言されている部分があり、宣教師ら教授する側も、学び取る側である日本人にとっても、甚だ困難な道りが待ち受けていたのは、容易に想像できるところである。このことから、どうやら教授されたのは、西洋音楽独自の協和音や調和によって決定付けられる多声音楽は避けて、単旋律のもののみ教授されたであろうと推察されている。しかも、グレゴリオ聖歌は、生徒たちが日常で使用する日本語とはかけ離れたラテン語で、言語の障壁の高さは、もちろん言うまでもない。

当時、日本の教会は、およそ200を数え、そこには年少者教育のために、教会附属初等学校が必ず設置されており、有馬や安土のセミナリオ、府内のコレジオでも、生徒らは、グレゴリオ聖歌を学んだ。これら教育機関での音楽教育を、西洋での教会を基盤にした教育と比較しながら調べてみると、相違点と共通点をともに見出すことが出来、大変興味深い。

グレゴリオ聖歌の旋律を習う段階に至った生徒たちは、通常西洋では、既にラテン語の読誦の訓練を受けていて、テキストの正しい発音及びフレーズはマスターしているのが前提だったそうだが、日本の児童達は、ラテン語の読み書きと並行で、歌唱教育を受けていた。西洋においても、記譜法が普及するまでは、口頭伝承で聖歌も教授され、範唱と模唱の反復練習が繰り返されて、ただでさえ時間を要するとされていたが、日本のキリシタンも同様の訓練を受けたのである。そして、驚嘆すべき進歩を見せていた。

ヴァリニャーノ来朝以前から、宣教師サンシェ

シュが、豊後の15人の少年達に、声楽とヴィオラが教授され、単旋律のグレゴリオ聖歌を各地に広げようとしていた。現山口県や大分県は、西洋音楽の発祥の地と呼ばれ、歌唱教育の成果に関して、いくつも例があるが、ジョアン・フェルナンデスの書簡にも、そういった記述が読み取れる。豊後の少年達が、詩編《Pater noster (主の祈り)》、《Ave Maria (天使祝詞)》、《Credo (信仰宣言)》、《Salve Regina (あわれみの元后)》、《Misere mei Deus (神よ、われらを憐れみたまえ)》などを全てラテン語で歌い唱えていた、とある。さらにこれは、後述する生月の歌オラショに、典礼の順を乱すことなく、完全に伝えられたものと一致しているともいう。

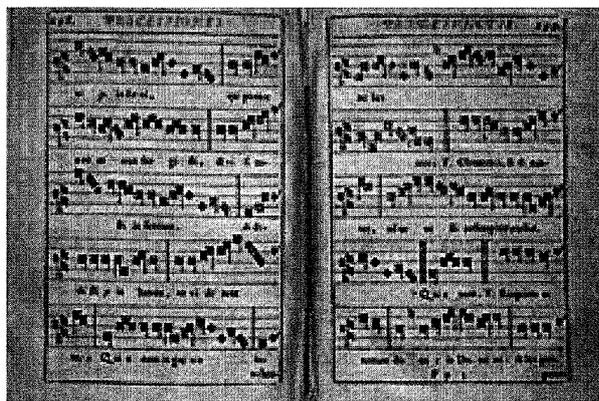
有馬のセミナリオの音楽訓練を詳しく見てみよう。生徒らの、祈りに始まり祈りに終わる聖務日課の中で、幾多の聖歌が織り込まれ、かように習熟する理由も納得できる。皆川達夫氏の研究の結果、彼らは、「毎日のミサの後、聖堂で《Pater noster (主の祈り)》および《(Ave Maria (天使祝詞))》を3回唱え」、更に「午後には、シメオンのカンティクム《Nunc dimittis (今こそ御言葉にしたがい)》および聖マリアの《ラタニアス (連禱)》を唱え…帰途には、《マニフィカト》を唱えつつ家に帰り…」とある。また、曜日ごとに異なる詩編を歌っていた(次頁左上表参照)。おそらく、生徒達は、ヴィオラ・ダルコという弦楽器の一種を用いて、音程をとりながら、また前述のラテン語歌詞の習得は、聴唱法により行われたのではないかと、推察されている。

大変遺憾なことに、彼らがこれらの聖歌を、どのような旋律で歌っていたか、という資料は、後の、秀吉によるバテレン追放令(1587)以後、キリスト教に対する、厳しい徳川幕府による完全な禁教体制(1614～)のもと、その殆ど全てが失われてしまっており、我々の推測の域を出ない。しかしながら、1605年に日本初のカトリック典礼書で、19曲のグレゴリオ聖歌の印刷楽譜である『サカラメント提要 Manuale ad Sacramenta Ecclesiae Ministranda』(次頁左

日	詩編109 [110]:《Dixit Dominus (わが主に賜った主の御言葉)》
月	ザカリヤのカンテイクム:《Benedictus Dominus Deus Israel (ほむべきかな, イスラエルの神なる王)》
火	詩編112 [113]:《Laudate Pueri Dominum (主の僕らよ, 主を賛美せよ)》
水	聖マリアのカンテイクム:《Magnificat (私の魂は, 主をあがめ)》
木	詩編113 [114]:《In exitu Israel (イスラエルはエジプトを去り)》
金	詩編50 [51]:《Miserere mei Deus (神よ, われらを憐れみ給え)》
土	賛歌:《Ave Maris Stella (めでたし, 海の星)》

下, 写真参照)が, 長崎で印刷・出版され, 現在, 国内では上智大学キリシタン文庫に所蔵されているほか, 禁教下の日本で, ひっそりとキリスト教を守り伝えてきた, 島原生月の隠れキリシタンの人々が歌う「歌オラシヨ」が, 随分日本語発音への転訛が見られるものの, 原語であるラテン語が, 後に皆川氏の独自の研究によって, もとの, イベリア半島系という地方色の強いグレゴリオ聖歌が特定される程度の変化で, 脈々と口承によって伝えられてきた。

筆者は, これら現存する一級資料としての価値を見出すばかりでなく, そこに宣教師たちの遺した熱意と人々の敬虔さをおのずと感じさせられ, 深い尊敬の念を覚えずにはおれない。



『サカラメント提要』(上智大学所蔵)

【器楽教育分野】

器楽に関しては, ザビエル来日当時から, 様々な洋楽器が日本にもたらされており, 最も初期の楽器に関する記述が見て取れるものの一つに, ザビエルが山口で大内義隆に謁見した際, 贈呈したとされる「響鐘の声と十三の琴の絃ひかざるに五調子十二調子を吟ず」る楽器, すなわちクラヴオ(現在のクラヴィコード)に相当すると思われるものや, viola d'arco があった。後者は, 明確な記述が残されていないので, 竹井氏のリュートである可能性もある, という見解にとどめておく。宣教師が宗教伝播の目的で使用した楽器は, 先述のように, 大別して弦楽器と鍵盤楽器に分類されるようである。セミナリオの教育課程でも, これらの演奏は, 重要な履修科目とされた。

さて, 弦楽器であるが, 聖歌の伴奏として用いられる際に日本人が弾くのは, かなりの困難を伴ったようである。一般のキリシタンを指してか, 宣教師側からみた日本人の弦楽器演奏については, 『イエズス会士服務規定』にて, 「日本人には…鍵盤楽器を除くヴィオラ・ダルコ…等の楽器の演奏を教授してはならない」という厳しい評価を得ているから, 竹井氏は, おそらく日本人の演奏は, 聴くに堪えない状態で, 宣教師たちが聖歌の音程をとって教授する際に用いていたくらいではなかろうかと指摘している。また, 日本人も, フロイスの『日欧文化比較』に見られるように, 「西洋人においては, 高貴な人びとはヴィオラを奏することを誇りとしている。日本では, ヨーロッパの手回し風琴を弾く人のように, それは盲人(琵琶法師)の仕事である」という事実にも起因したものか, さして自ら馴染もうとする類のものではなかったのかも知れない。

一方で, 日本人は, 鍵盤楽器には並々ならぬ興味を示し, 実際, セミナリオでの教育により, 生徒たちは大いなる上達を示した。セミナリオでの教育は, 先にも述べたように, ラテン語・日本語の習得と, 音楽教育の三分野を軸としていたから, 音楽教育に充当される時間もかなり多かった。また, 音楽教育を受けるもののうち,

器楽に精通するための特別な指導を受けるには、とくに才能のあるものが選ばれたようである。セミナーオでの生徒達の一日を追ったものから、音楽に関する部分を抜粋してみると、以下のようである。

午後は二時から三時まで、唱歌や楽器演奏の練習時間がとってあり、既の上達したものが教師の助手として、他のものの練習の手助けをすることもあった。祝日のない週にも、聖歌の合唱や、クラヴォ、ヴィオラ・ダルゴ、オルガン、その他楽器の練習は課せられており、日祝日、また天候の良くない日にも、音楽教育を受けているものは、演奏の練習をすることが、ヴァリニャーノの定めた『セミナーオ指導規定』(1582)で、義務付けられていた。

南蛮渡来の鍵盤楽器の中でも、ヴァリニャーノと特に深い関係があり、なおかつ日本人の注意をもっとも引き、好まれた楽器は、オルガンである。おそらく、初めて日本にオルガンを携行したのが、ヴァリニャーノその人であったとされるほど、オルガンは彼にゆかりの深い楽器なのである。竹井氏は、ヴァリニャーノの来朝年、1579年を境に聖歌演奏の記述が「com orgao (オルガン伴奏による)」という記述が現れ始めたことから、この説の重要な裏づけになる、と指摘している。もちろん、オルガンも典礼のための楽器として最もふさわしいものの一つで、来朝以前、オルガントーノが送った、「五機内にオルガンやその他の楽器…を送ってくれさえすれば、わずか一年以内に、日本の主要都市である京と堺を改宗せしめん」という意気込みを綴った書簡に、応えようとしたというのが主な理由であろうが、ヴァリニャーノは、来朝時2台のオルガンを携えてきたので、フロイス書簡にあるように、京に上る途中、立ち寄り先の高槻にて、高山右近にオルガン演奏を聴かせたり、1581年には織田信長の城下町・安土と、大友宗麟の治めた豊後白杵に、それぞれ設置した様子が、『イエズス会日本年報』から知ることができる。日本人は、珍しい異国の楽器を、大絶賛したともある。

さて、ヴァリニャーノの携行したオルガンの

種類は、移動の先々で演奏されていることから、ポジティブと呼ばれる、携帯用の小型のオルガンではなかったかと類推される。これに関しても、具体的な記述は、ほどなくしてキリスト教禁教・迫害を経験したためか、今日には、残念ながら残っていないが、ブリキ製のパイプに、ふいごを有するような形のものであったらしい。日本でも、1600年以降、本渡の西方、志岐にイエズス会の工芸学校があって、イタリア人の修道士、ジョアンニコラオが政策の指導者となって、オルガンを製作していたようだ。「ヨーロッパのそれよりはるかに太く、丈夫な一種の筒である。竹筒で何台かのオルガンが製作された。…柔らかな音色を有していた。主要な教会には、以上のようなオルガンが備え付けられている…」とあることから、日本人にいかにかこの楽器が好まれていたか知れよう。戦国の世にあって、布教のための一つ的手段に過ぎないはずのオルガンが、国内産のものまで出現するほど、受容されていた様子が読み取れる。

ヴァリニャーノは、1582年に有馬のセミナーオから、正使として伊東マンショ（大友宗麟の名代）、千々石ミゲル（大村純忠、有馬晴信の名代）、副使として中浦ジュリアン、原マルチノの4人の少年達を選出し、彼らを欧州留学させた。これが世に言う、天正少年遣欧使節の派遣で、彼らの最たる目的はローマへ入り、教皇に謁見することであったが、この遙かなる旅中、イタリアのほかには、スペインやポルトガルの各都市を歴訪して、ルネッサンス黄金期の西洋の音楽に触れた。

そして、日本の宗教音楽教育史上で、もっとも輝かしいことの一つが、この旅の途中にある。今日、ユネスコの文化遺産に指定されている、ポルトガルの町エヴォラに、かのヴァスコ・ダ・ガマにもゆかりの深い、エヴォラ大聖堂という壮麗な大聖堂が聳え立っており、この教会内に、製作者は不明であるが、1562年に作られたパイプオルガンが設置されている。これは、現在では、ポルトガルで最も古いもので、かつ、今尚演奏されている大オルガンであり、これを伊東マンショと千々石ミゲルが奏して、人びとから

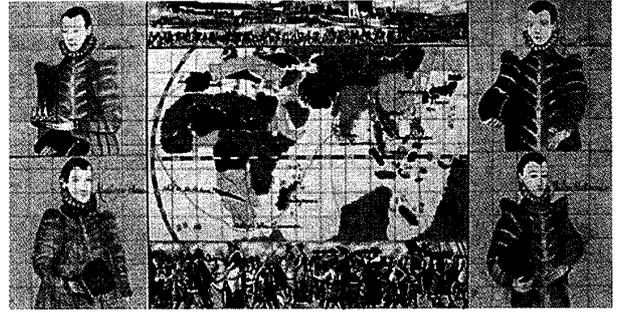
喝采をあげたというのは、あまりにも有名である。

歌唱の分野とも重なるが、使節団派遣記として後に、デ・サンデがまとめた『天正遣欧使節記』は、初めて西洋の音楽を肌で感じたときの、彼らの大なる驚きと鋭い分析を、400年を隔たった私達に、鮮やかに伝えてくれている。主人公・千々石ミゲルの言葉でそれは綴られ、彼は、複旋律の響きについては、「西洋音楽は、全て声が…同時に巧みな節調をもって発せられて、そこに一種えもいわれぬ和音・諧調を生ずる。」と述べ、また日本音楽との比較を省みて、「日本音楽は、今までのところ、音楽の技芸もなければ、訓練も全く存在せず、こよう技芸や訓練なくしては、和声の規律も又学び得ない…西洋音楽には、音の複雑な変化の心得があり、巧妙な製法による楽器があり、また音楽の書物も多く、楽譜の種類も驚くばかりに多数あることによって、この技芸を非常に輝かしいものにしてきた」とも述べている。

彼らは、帰国の途につく際、様々な音楽書や楽譜、その他様々な楽器も、印刷技術と共に持ち帰り、先述の『サカラメンタ提要』のところで記した、日本人による楽譜が印刷されるというように、歴史が繋がっていくのである。

また、彼らは帰国後、聚楽第にて秀吉の前で御前演奏を行ったとされている。ここでは、八年もの長きにおよんだ使節としての旅の途中でも、ずっと受け続けてきた練習の成果を見事に発揮し、それぞれクラヴォ・アルペ（ハープ）・リュート・ラベイカ（ヴァイオリンの一種）の楽器を演奏して、秀吉は3度も彼らにアンコールを送ったという。既に、キリスト教を邪教とみなしていた秀吉にも、彼らの演奏は政局の様々な憂いを一時忘れせしめ、聴きいらせたのだった。

結局、この後、秀吉の後に政権を握った徳川幕府によって、キリスト教は徹底した壊滅状態に追いやられていき、成人してカトリック司祭の叙階を受けて活躍した元・天正遣欧使節達も、マカオへの追放や殉教の憂き目に遭い、キリシタン暗黒時代を迎え、かつては、織田信長や、その他キリシタン大名など権力者をも喜ばせたキリスト教の宗教音楽も、その教育機関も、全て運命をともにする。そして、1864



天正遣欧使節：伊東マンショウ（左上）、千々石ミゲル（左下）、原マルチノー（右上）、中浦ジュリアン（右下）。1586年ドイツのアウグスブルクで発行された木版画。原図の木版画は、京都大学蔵



The Organ of Evora Cathedral, Portugal

年に長崎で潜伏していた信者が発見されるまで、日本の教会は、ひっそりとその影をひそめてしまうが、その間においてさえ、彼らの間で信仰が守られ、脈々と「歌オラシヨ」が歌い継がれてきたことは、驚嘆するというほかにない。教会の建築物はことごとく破壊され、器楽も邪教を広げる手段として処分されたなかで、オラシヨは口承であったゆえの、貴重な遺産であると言えるだろう。

結

以上、ヴァリニャーノの教育方針とセミナリオでの実際の内容等、宗教教育機関での音楽指導を中心に、周辺の諸事情にも細かく注意を払って、概観してきた。戦国の激動期にあって、勢

力拡大と私腹をこやすことを目論んだ各々の為政者の思惑, 新来の異郷を受容する側の態度, 宣教師間の裏に潜む, 西洋大航海時代の様相が, 宗教伝播の実際において, どれだけ多くの要因となって, 複雑に絡みあってきたのか, そしてその中で, 純粹に神の福音を述べ伝えようと, 現地日本人の心を最も捉え, 彼らの愛好した音楽教育を重視した布教法を選択したヴァリニャーノら宣教師のこと, そして短いその教育の輝かしい成果としての, 天正遣欧使節団の派遣, 禁教にあっても歌い継がれてきた日本版グレゴリオ聖歌である歌オラシヨの存在を通し, 筆者は, 日本における西洋音楽教育の萌芽を見出すとともに, 四百年もの遠い時間を超えて, 初めて出会った西洋と日本の交流に思いを馳せ, 宗教伝播がもたらした教育の意義と, それに付随する祈りの音楽の偉大さに, 改めて深い感動を覚えているところである。

謝 辞

尚, 小論の作成にあたり, 南蛮渡来の音楽研究の第一人者である皆川達夫氏ならびに竹井成美の両氏の著作, また南蛮研究の権威, 松田毅一氏はじめその他多くの先達の研究によるところ甚だ多く, ここに深く謝意を表す。

〔引用文献・参考文献〕

- 竹井成美; 『南蛮音楽—その光と影』, 初版, 東京, 音楽之友社, 1995
- デ・ルカ・レンゾ; 『ザビエルとヴァリニャーノの教育宣教(下)』, カトリック生活7月号, ドン・ボスコ社, 2006
- 松田毅一; 『ヴァリニャーノとキリシタン宗門』, 初版, 東京, 朝文社, 1992
- 松田毅一; 『キリシタンの学校』, 探訪大航海時代の日本 vol.6, 相賀徹夫編集, 初版, 東京, 小学館, 1979
- 松田毅一; 『西洋人のみた日本と日本人』, 同上
- 松田毅一; 『南蛮の世界』, 初版, 東京, 東海大学出版会, 1975
- 水嶋良雄; 『グレゴリオ聖歌』, 第六版, 東京, 音楽之友社, 1975
- 皆川達夫; 『音楽』, 探訪大航海時代の日本 vol.6, 相賀徹夫編集, 初版, 東京, 小学館, 1979
- 皆川達夫; 『洋楽渡来考—キリシタン音楽の栄光と挫折』, 初版, 東京, 日本キリスト教団出版局, 2004
- 森 裕子; 『vol.1音楽の思想と教育』, 音楽教育史論叢, 河口道朗監修, 初版, 東京, 開成出版, 2005